

80 明治9年3月14日 菊池長閑宛

第三号三月十四日 (長閑注記)

第一号玉章拜読殊の外忙敷新年を迎られたる由然し荷卸しの後ハ嘸大安心されたるならん阿寿美の作文并手紙の出来実に驚入たる手際前年よりハ余程学識の進みたと覚ゆ感服々々此様な面白き新聞はなし兄ハ数々字を忘れヘポンの字引とて英語に日本訳を付たる字引にて英語を引キ初て字を知る事俣あり勿論熟

字杯ハ覚より忘れる方多ければ帰朝の後ハ妹に就て稽古セねは成らぬかも知ず只願くハ此後共撓すに学問し統最早十四に成たから学問ハ止めにする云事なしに仕度ものなり当地の婦女ハ十七八或ハ二十位迄ハ学校に通ふハ通例の事なり男二十五歳女二十一二以上ならねは婚礼セぬなり其以下にて嫁すれハ世人之を早いと云ふ婚礼の晚い早いハ人の学識に係るのミならず身体の強弱に管する事至て大なり日本人の体格矮少にて虚弱なる事一ツハ之に依るかも知ず昔若婚礼の不流行ノ時の人ハ大にして丈夫なりしを以て思当るへしさて阿寿み如斯学才あるに付此人丈ハ昔の阿嬢さん風ハ脱すへし夫に付ても半にして廢絶さするハ甚た惜き事盛岡にて婿を探し与るハ些と面白からず私の帰朝の日も未タ十六歳にも成ましかれハ何程日本流義にても婚家の時節後れと云年齢にても有まし其処て少し架空の想像かも知ね共私の考にハ急て迎婿する事ハ止め(御祖母様ハ早く婿を為持て見度かハ知ね共)私の知己中に盛岡婿より好い人の有かも測られ(今分ハ当も)されハ其人に嫁せてハ如何と思なり若し私帰朝後幸に京地て活計を立を得ハ阿寿みを召寄セ得かも不知不然共本宿の家族在京する事なれハ右に同居を頼み置き阿寿みの望みあるに於てハ師範学校或ハ他校他師に就て猶一層有益の学問さする事も出来可申右様の見込にて育てハ如何のものなるへきや然し阿寿みに盛岡の家産整理さする尊意あるかも測られたれ共其儀ハ私如何共其上策なるや否やを知不能且盛岡表所有物ハ飽迄も菊池家の財産となし之を理治するの法方ハ追て愚見を述る事あるへし」修業の足しにも成へけれハ時々手紙を送呉てハ如何阿寿みさん」当府に

てハ昨日飛雪紛々たりし夫時迄ハ誠に春気候なりしも今日杯ハ頗る寒冷なり海岸故か東京と同く気候の変にハ困るなり今日五日にハ愈大副統領就官の礼を行了長々の争議初て平穩に定り国民一統悦の色を顯セリ誰か大統領に成か分ざりし故商業も大に妨られたる所追々繁昌に趣様子」私共来年の夏より英国に渡ると願書を出たり(未タ秘密ナリ)若し許可あれハ残り二年ハ彼国にて送るへし且歸りにハ印度の方を廻へけれハ二度同し桑港(サンフランシスコ)を通るより遙かに面白かるへし去る井ハ先地球を一周したと云て可なり今の世の中ハ実に面白し昔ならば高て東京か京都を見て満足セねは成ざりしに盛岡辺りから這出して地球を一周するとハさても〳〵大〇た

敬父君

武夫拝

(長閑注記)

「四月廿八日達日教四十六日

返事第五号ヲ以五月十二日出し」